

立花便覽

中

386

目錄

蓮花生乃事

掛花生乃事

二重切花生乃事

蓂花生乃事

釣糸乃事

屬下花生乃事

花桶乃事

像乃類乃事

をら乃花生乃事

炭花乃事





○新花生之事

一床或ハ棚下に大鉢とて種ヲまきたる人の物一色又ち  
之矣立色トモ色あわく生ハ海の大やうありそのなり  
と色あよつひて生今さふくひさう勢の葉あせころをわ  
わく海ノ草末

すくこ さう百合 芍薬 桔あ とうゆりほん

右梅菊 めいゆり 梅ら とうろ ねなゆり ぶ葉

梅 もく 菊む 卵の花 げんしゆ 紫葉

白丁 芥子花

凡ハホの影あつらへくくく人合はるの事一之後也

○船舟之事

とくかかす舟乃船屋の舟舟舟入舟とゆりかひと  
はりやうまへくひるあつて入舟東あつたにゆりあひ  
なとくはらふをれをむりしかおむしかあつたをれをれ出  
舟ゆりへく東あつたにゆり舟の志るるうの舟わらふの  
舟とやへらまへくは船舟は花と生をくまへくあひあ  
ひとさくやうさぶと作まへくとはつひの花と生るるに舟  
れいどれ屋うやまうと石思候はありひゆらむとひけ  
おんこまへく終よまをれをれ人連も舟のいどさくや  
あへく作まへくくくく得せく舟をれをれあり  
舟の花よあれやうあつてくくくせえ終るるをれをれあり  
あへくすくこ 花さくく せんあう 卵花 船舟の事

びる柳 ちりき 花さる 柳 仙の死 水鏡  
かう骨 をもた 蓮 梅 色く 花じ

望まぬ類物まへへ一色三三をみまへは九合生へ事  
○ 屬下花生事

一高より下の花生ふふ小はより多ふれは是大屋う守り守り  
海へ物よそそ色望まぬ類へ横へなりくおへはあそ

るかへり かく歩 生て知らるる草木花事  
合残死 かん菊 非法師 あわふ 足さう 骨

かひ せき せき せき せき せき せき せき  
あき せき せき せき せき せき せき せき

○ 花の類事

一ひささ 類何あへては人合生るる一子にあふはあ  
一ひささ 類何あへては人合生るる一子にあふはあ  
一ひささ 類何あへては人合生るる一子にあふはあ

杜若 あ仙 菊 芍薬 ああひ 足さう  
かんひ せき 蓮 三三 せき せき  
はな 仙 桔梗 せき せき せき

ひめゆり 〇 像の類事  
〇 像の類事

一像のそとひとりのあり或は若く身又六かやあつて仙人の像  
 花物ごとくよ花屋に志す花物より一花の花生とら  
 ぐひを合めくこ物あり志すあつてはては仙人の  
 像あつておのゝる花物も持へし無花像のそとひあつ  
 ぬるうづどさく生く花物より一花を合めく草木  
 わり申

萩 刈萱 竜膽 ちぢぢ ちぢぢ ちぢぢ

たつた 花いらこ 野菊 法ド 法ド 法ド

おこあ草 菜の花 一ツ葉 白丁也 わざと

たつた 一徳足 ちぢぢ ちぢぢ せんま

はゆあゆりうづこ一合生くのちのちのち

むら板とうけ花生とうけりうや麻あふ無花あ  
 時むら板とうけ花物とらうむら板の中はそと海  
 ね打ととらと屋にして花生あつても花物と花  
 生れあふりわけりけれ自由あつては花物と花  
 物と花物と花物とむら板の長くあつて法を分れと  
 ちぢぢと花物と花物とちぢぢと花物と花物と  
 ちぢぢと花物と花物とちぢぢと花物と花物と

○炭花の事

一炭花とよみとて入りて又守り又す程のうと花物と花物  
 炭とよみ中折の汗はとて花物と花物と花物と  
 ちぢぢと花物と花物とちぢぢと花物と花物と

元日より十月までこの祝儀に下しゆつたは松風用也

○あひやうの事

一あひやうはあひては生色一足に白紙を  
あつてあつたふりてなるがゆへ

○竹花生切極る事

一竹の廻りて又つめおして一つ分けて地長とあり  
分但し四つ内一つ分はあつた一つ分はあつた  
捨極るの四つと一つ分はあつた一つ分はあつた  
後の竹一葉と捨極る下と竹一葉をあつた一つ分はあつた  
切つた竹葉はあつた竹の根子ばかり作さる  
一花生よいといふはあつた一つ分はあつた一つ分はあつた

一花のこころあつて一葉の白く足る葉のけを  
あつたけとてゆりあつた一つ分はあつた一つ分はあつた

一花はよ菊あつた菊はあつたあつたあつたあつたあつた  
祝わきとてはあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
二つとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
一つとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

一花はあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

かゝるどお詮じり

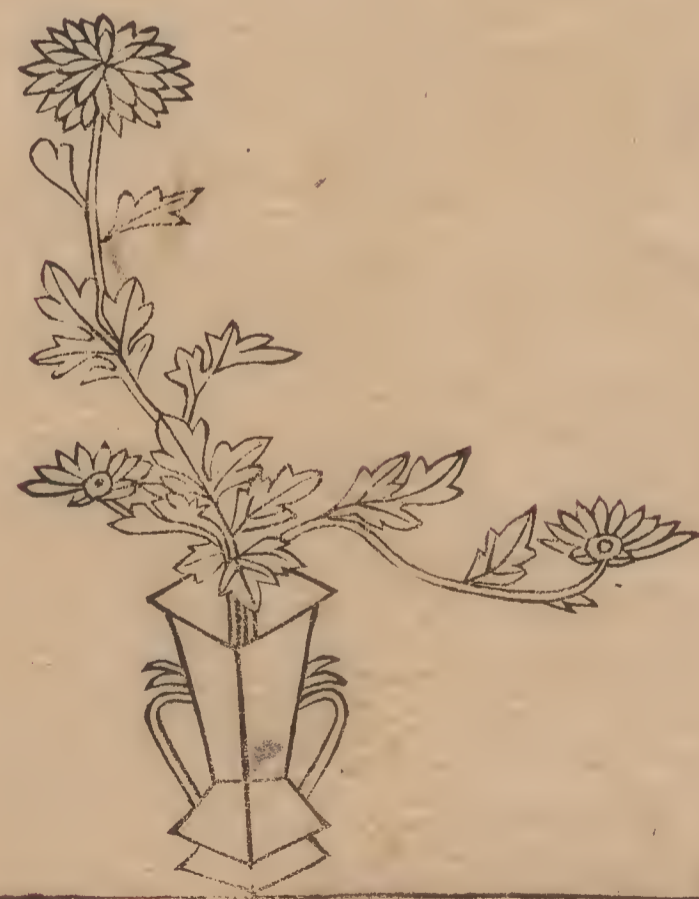
一生花のきと物とぬくぞ今よりぬくはしるがうしとの親  
あまると色よりうぬまり一草一本はさるたとして生くる  
とほのあをく或はあゆ仙とせうにさ物とましくはしてを  
葉れらるるこまきうす葉乃より扇うぬ習をこ又  
花と葉のうくはうあふはむの付物なり是もきく  
あやめぬくはしてさるる事一ゆき

一庭前乃草もあしける事一わり一あさうわとぬく  
作りをうけ人のまけるにあゆ人ひあさうぬく葉  
やうけ交う一やさるぬぬ物あまこと作世に  
か乃人ほひまの終りにあさうか一掃とあけきさるん

やさるあさうあさうぬぬ葉湯をれんたかう一さひひあぬ  
と一掃せとさる一作きこゆり一ろさ事一り

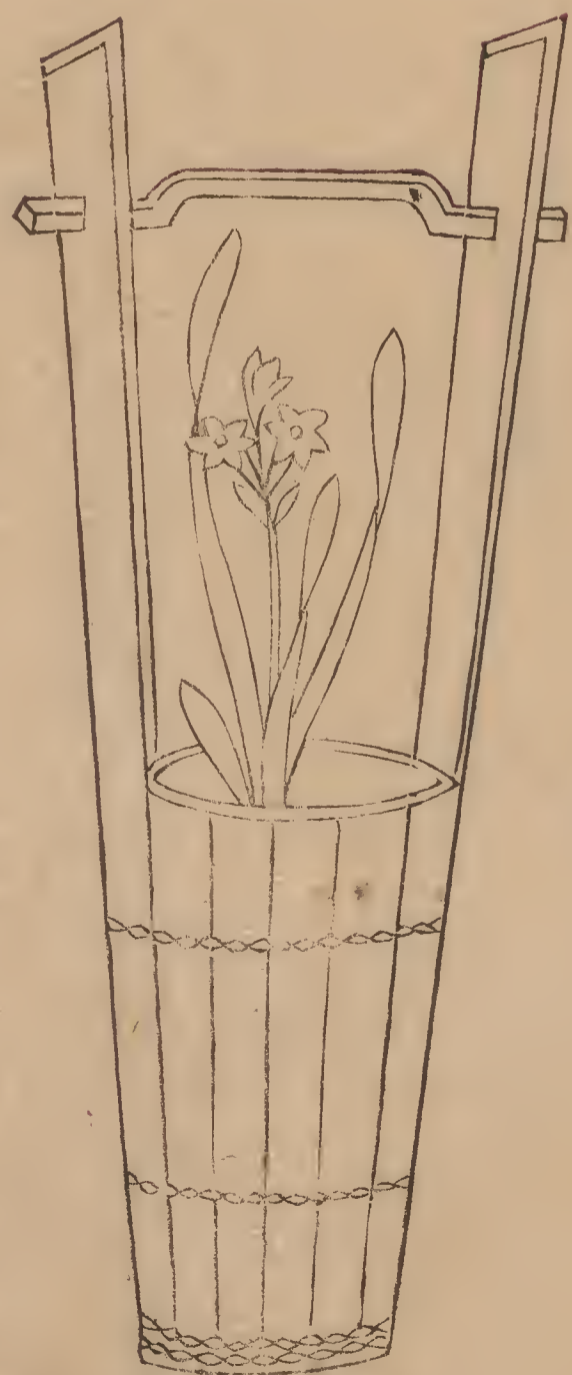
一此終るま乃末より夏秋のちどあまそいひらな  
あさひのくま院のさねはほる一又秋の末より冬まれ  
ちどあまそいな庭あ乃天井の宇程よはらるるなり  
一書後の物もなす時と花ともしちて又石の作と  
あさう

一まに十月と冬に十月とあな庭あよ天井とをうぬ  
炭のをぬぬくはとさる









像之類





炭花



同

